

【研究論文】

ルーブリック評価の運用に関する研究 —小学校各教科の模擬授業・卒業研究の場合—

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 教授 岡

利道

教授 今崎

浩

講師 大野内 愛

はじめに

本研究は、初等教育学科における教職科目のうちの「教育実習Ⅰ」（小学校）と、専門科目の「卒業研究」で実施しているルーブリック評価の客観性及び妥当性を検討し、改善点を見出すことを目的とする。

研究の方法としては、平成27年度の同科目担当教員、及び受講生（「教育実習Ⅰ」のみ）にアンケートを実施し、分析・考察していく形を取る。

I 「教育実習Ⅰ」（小学校）における模擬授業・自己評価ルーブリックについて

平成26年度から使用している標記のルーブリックについては、平成27年度までの2箇年を経て、導入したことの实效を検証する意味で、この度の検討・研究となった。導入の経緯等については、今崎（2015）により詳らかになっているので、ここでは省略する。その有効性を明らかにすること、さらによくするためには何がいるのか等を見出すことがここでは肝要である。以下、教育実習Ⅰの評価ルーブリックについてのアンケート結果とその分析・考察を示すことにする。

1. 担当教員の場合

アンケートの対象教員は、教育実習Ⅰ（小学校）担当の全8名である。有効回答数は7であった。以下の(1)(2)ともに、である。なお、ここでの評価にあたっては、ダネルら（2014）の研究における「ルーブリックを総合的に評価するメタ・ルーブリックの例」（p.79）を使用した。

(1) 模擬授業・自己評価ルーブリックに対する評価ルーブリック

まず、各区分・評価項目毎の評価結果を示すことにする。

区 分	評 価 項 目	肯定的	否定的
評価規準	評価規準は、最終的に学生に求められる行動の要点を含んでいる。	5	0
	この模擬授業で重点的に取り上げるテーマに関連したものが設定されている。	5	0
	全ての評価規準が明確である。	2	4
	評価規準は、それぞれ明白に異なるものである。	4	2
	評価規準は、学生がある程度知識を持っているスキル（教材研究をする、学習指導案の作成をする、模擬授業をする）に対応している。	6	1
評価基準	評価基準は、各評価規準に対応している。	5	1
	各評価基準は、明確であり、類似の評価基準がない。	4	1
	点数が記載されている場合、評価基準ごとの配点は妥当である。	4	0
	評価基準は、偏りがないように適切に割り振られている。	5	0

評価尺度	各段階に設定された評価尺度は、各段階の評価基準にふさわしいものである。	5	0
	到達段階を示す評語（ここではレベル4・レベル3・レベル2・レベル1という各段階の名称）は、否定的であったり落胆させたりするものではなく、肯定的で、示唆的である。	6	1
	到達段階の数は、評価対象者の年齢や課題の内容に対応している。	4	0
ルーブリック全般	評価しようとする学習成果に関連していることが明確である。	6	1
	専門外の人も理解できる（専門用語を避けている）。	5	2
	教えることが可能なスキルを対象にしている。	6	0
	評価しようとする学習成果とは無関係の、この模擬授業で扱っていないスキルに基づいて、学生が評価されることはない。	4	<u>3</u>
	この課題を完成させるために必要な事項やスキルを獲得する機会は、全学生に平等に与えられている。	6	1
	実際に学生によって課題が完成された状況に見合うものになっている。	5	2
	表題および課題の内容が明記されている（この模擬授業がどの授業科目で行われており、どのようなねらいで学生が行動するのが書かれている）。	5	2
	学生に求める行動は、一つの発達課題となっている。	4	2
	学生にとって、成果物が採点される手順がわかるものになっている。	5	0
	個人あるいはグループの行動を評価し、改善のための方法を示すことを重視している。	5	2
公平性と有意性	全学生にとって、公平で、偏見のないものである。	7	0
	学生にとって、自らの行動に対するフィードバックとして有益である。	7	0
	課題の性質から判断して、実用的である。	5	2
	読み手が意味を理解できる。	5	2

表1.1 結果：自己評価ルーブリックに対する評価ルーブリック

なお、特にコメントがある場合、自由記述欄に書いていただいたが、それも示しておきたい。それは、この評価表において難解な（わかりづらい）用語・表現があって評価しにくかったというのが2、この形ではなく区分の評価基準のところだけでなおかつ4段階評価とする方がよいというもの1、という状況であった。

それを受けてか、二件法の評価スタイルであったが、つけられないという理由で無回答であるケース、どちらでもないという理由でYesとNoの中間にマルがつけられているケースがあり、各項目の全回答数が7となっていないところが出てきたのである。

評価できる点を挙げると、区分・「公平性と有意性」における評価項目・「全学生にとって、公平で、偏見のないものである。」と同区分の評価項目・「学生にとって、自らの行動に対するフィードバックとして有益である。」が満点となっており、2年前からこの評価ルーブリックを取り入れたことが強く支持されていることがわかった。

目立つところで問題点を挙げるならば（3名以上が否定的であるものを要チェックと見なし、アンダーラインを付したところ）、第一に、区分・「評価基準」—評価項目・「全ての評価基準が明確である。」で肯定よりも否定が多くなっている点であろう。直下の区分・「評価基準」—評価項目・「評価基準は、それぞれ明白に異なるものである。」でも否定が2あることともつながるだろう。このことを受け、本稿で後に示す結果や分析・考察により、どこが問題なのかを具体的に検討していくことになる。

問題点の第二は、区分・「ルーブリック全般」—評価項目・「評価しようとする学習成果とは無関係の、この模擬授業で扱っていないスキルに基づいて、学生が評価されることはない。」で否定が3と多くなっている点である。その理由として、この教育実習Ⅰ（模擬授業）で扱うスキルの定義づけが難しいことが指摘できるだろう。試されるスキルは多様に広がる。この授業で扱うスキルと、

これ以外の授業で扱うスキルとの境界線は確かに引きにくい。しかしながら、その中で、最も大切なスキルは何か、それを向上させるためにはどうすべきか、をはじめとして、担当者と学生でしっかりと確認しておく必要があるだろう。

当然、当該ルーブリックの各箇所にそのスキルは示されているはずである。その全てを身に付けさせようとするのか、ある程度重点化するのか、担当教員・学生で共有化できるのが望ましいと考える。

(2) 模擬授業・自己評価ルーブリック

まず、各区分・評価項目毎の評価結果を示すことにする。四件法で、4が最も肯定的であることを、1が最も否定的であることを示す。否定的な評価が2名以上（約3割以上となるもの）を要チェックと見なし、アンダーラインを付すことにする。

1. キーワード	4…0名	3…6名	2…0名	1…0名
2. 評価規準	4…2名	3…4名	2…0名	1…0名
3. 評価方法	4…3名	3…2名	2…1名	1…0名
4. 教材分析力	4…2名	3…4名	2…1名	1…0名
5. 授業構想力				
指導観	4…3名	3…3名	2…1名	1…0名
評価計画	4…2名	3…4名	2…1名	1…0名
学習過程	4…4名	3…2名	2…1名	1…0名
板書計画	4…2名	3…2名	<u>2…3名</u>	1…0名
6. 教材開発力	4…3名	3…2名	<u>2…2名</u>	1…0名
7. 授業展開力				
学習規律	4…2名	3…3名	<u>2…2名</u>	1…0名
質問→対応	4…0名	3…4名	<u>2…3名</u>	1…0名
意見→活用	4…0名	3…6名	2…1名	1…0名
遅れがち児童への	4…0名	3…4名	<u>2…3名</u>	1…0名
8. 表現技術				
発問・指示・説明	4…4名	3…2名	2…1名	1…0名
板書の実際	4…2名	3…2名	<u>2…3名</u>	1…0名
9. 全般				
役に立ったか	4…1名	3…4名	2…0名	1…0名
授業力向上に活用	4…2名	3…4名	2…1名	1…0名

(自由記述) 4名

- 8人の教員の評価の公平性を保つ上では有効である。自分自身としてはまだあいまいになってしまうのが反省点である。
- 全てを含めた全般的評価という項目があってもよい。
- レベルを3段階にしてもいいのでは（実習Ⅰの段階）。
- 学生が3年前期という段階に求められるレベルであるかどうかを吟味した上で、総合評価規準を検討したい。新採・5年…現職教員のレベルをめざすのは当然だが、養成段階に即しているのかの検討が必要と思われる。

以上のことを踏まえ、若干のコメントをしてみたい。

まず、問いの1から9の前半までの、四件法の部分についてである。先の場合と同様に、空欄や二件にわたってマルがされているものがあり、それらはカウントしなかったため、項目の総計が7になっていないところがある。否定的な評価に注視すると、1のレベルはなかったが、2のレベルは、少なからずマルがつけられていた。2名以上の部分にアンダーライン（太字）を施している。

板書については、5番・8番とも該当する。工夫しているというのはどのようなものなのか、あるいは展開上やむをえず板書が少なくなった場合の評価の難しさ、等が原因としてあるだろう。その他の項目についても、具体性を持たせ、担当教員がさらに確実な評価ができるよう、改善が求められる。いずれにせよ、学習指導案の末尾に付ける板書計画図が大切になるのは明白である。教材名、学習のめあて、学習の展開（中心的内容）、振り返り（まとめ）のそれぞれを具体的に示していくことが求められる。

9の後半の自由記述からは、次のことが言えるように思う。まずは、このレポートを受け、改善に向けての一步を皆で踏み出すことである。そして、ループリックの項目や表現の内容をできる限り可視化し、また各人の腑に落ちるように、共通理解を進めていく努力をすることである。

2. 学生の場合

学生の場合は、模擬授業・自己評価ループリックアンケートだけの分析・考察となる。対象学生は、教育実習Ⅰ（小学校）を履修した全73名である。有効回答数は71であった。各区分・評価項目等は、教員の場合と同じ設定である。否定的な評価が15名以上（約2割以上となるもの）を要チェックと見なし、アンダーラインを付すことにする。

1. キーワード	4…7名	3…45名	<u>2…14名</u>	<u>1…1名</u>	無…4名
2. 評価規準	4…12名	3…48名	2…10名	1…0名	無…1名
3. 評価方法	4…9名	3…44名	<u>2…15名</u>	1…0名	無…3名
4. 教材分析力	4…12名	3…43名	<u>2…16名</u>	1…0名	
5. 授業構想力					
指導観	4…16名	3…46名	2…9名	1…0名	
評価計画	4…17名	3…44名	2…10名	1…0名	
学習過程	4…17名	3…43名	2…11名	1…0名	
板書計画	4…23名	3…39名	2…8名	1…1名	
6. 教材開発力	4…15名	3…49名	2…7名	1…0名	
7. 授業展開力					
学習規律	4…14名	3…40名	<u>2…17名</u>	1…0名	
質問→対応	4…17名	3…40名	2…14名	1…0名	
意見→活用	4…14名	3…46名	2…11名	1…0名	
遅れがち児童への	4…20名	3…32名	<u>2…19名</u>	1…0名	
8. 表現技術					
発問・指示・説明	4…29名	3…35名	2…7名	1…0名	
板書の実際	4…16名	3…41名	2…14名	1…0名	
9. 全般					
役に立ったか	4…25名	3…34名	2…12名	1…0名	
授業力向上に活用	4…26名	3…38名	2…7名	1…0名	

（自由記述）11名

ここについては、問題点の指摘・問題点の指摘とよかった点の指摘・よかった点の指摘の3種に分類して示すことにする。早速取り入れるとよいと判断されることがある。次年度に向け、皆で把握しておきたいと考える。

問題点の指摘

- a “適切に”とか“的確に”といわれると、どうなのだろうかと判断に困った。

模擬授業15分では評価できない項目があった。

「すべての児童を授業に参加～」の項目です。

- b 1～3の書き方がわかりませんでした。
事後評価アンケートの〇〇が返ってきません。
- c 全体的に評価しにくいと感じる。
3と2の間でずいぶんちがう。
- d 担当の教員から、自己評価シートが返却されていないものがあるため、統一してほしい。
授業展開力は、自己評価しにくいと感じた。
- e 授業準備の時からこのループリックを手元において指導案や授業の流れを事前に見直したかったです。
- f 体育や音楽では活動中心で板書があまりなかったから、板書計画で「1時間の学習の流れが分かるように」という項目をどのように評価してよいか分からなかったです。

問題点の指摘とよかった点の指摘

- g 先生からのコメントだけでなく、評価した数字の理由（一言でよい）もあると今後改善するのに役立つと思いました。
私の弱み（課題）と強みを書いてくれる先生のコメントがありがたかったです。
- h 抽象的な部分があるため、そこは具体的に評価基準を設けてほしい。
評価ループリックがあることによって、模擬授業の振り返りが効果的に行えたのでよかった。
- i このループリックの評価が書きにくい。
ループリック自体は自分の振り返りを自分と担当教員側の2視点から分析でき、よかったし、扱いも難しくなかった。

よかった点の指摘

- j 自分の模擬授業を評価するためにこのシートは非常に役立った。最後にコメントをくれる先生がいたので、次への意欲につながった。
- k 指導案を作成する時に、どのようなことを書けばよいかイメージしやすかったのでよかったです。

特に、「先生のコメントがありがたかった」とあるように、ループリック評価が真に血の通った評価となるために、担当教員の一言、あるいは書き込みによる助言・励まし等を、でき得る限り加えていくべきことを記しておきたい。

教員のところに倣い、さらにコメントを加えることにする。

まず、要チェックの項目であるが、先の基準で挙げるならば、学生からは5項目・教員からは6項目ということになる（下線部のところ参照）。下表をご覧ください。

項 目	教 員	学 生
1. キーワード		○
3. 評価方法		○
4. 教材分析力		○
5. 授業構想力 — 学習指導案の記述（板書計画）	○	
6. 教材開発力	○	
7. 授業展開力 — 学習規律の指導	○	○
7. 授業展開力 — 児童からの質問への対応	○	
7. 授業展開力 — 遅れがちな指導への指導	○	○
8. 表現技術 — 板書	○	

表2.1 項目毎の評価状況

特に、「7. 授業展開力 — 学習規律の指導」と「授業展開力 — 遅れがちな指導への指導」の項目は、教員・学生とも要チェックのものである。これらの点については、以下に若干の改善の方向を示したい。

項目 7. 授業展開力 ― 学習規律の指導 について

ループリックでは、レベル4にある「学習規律について毅然とした態度で指導している」「学習規律を守っている児童を褒めたり、学習規律を守る意義を説明したりする等している」の2事項がポイントとなる。それらが、具体的にどのようなパフォーマンスであるのか、イメージしにくいとの判断がなされているのである。

他の項目・事項についても言えることであるが、このイメージの共有化ということが大切になるだろう。「学習規律について毅然とした態度で指導している」の場合は、それができていない時に、例えば“徹底するまで学級全体で繰り返させる”はたらしかけをするというパフォーマンスが的確になされる必要があるだろう。また、「学習規律を守っている児童を褒めたり、学習規律を守る意義を説明したりする等している」の場合は、“学習の準備や、挨拶・受け答え、話している人を見て聞くなどのことがしっかりとできている児童を大いに褒める”とか、“学習規律は、誰もが気持ちよく学習を進めるための大切な手段であることを、児童の発達段階に応じて適切に説明している”とかのパフォーマンスが実現されているべきであろう。

項目 7. 授業展開力 ― 遅れがちな指導への指導 について

ループリックでは、レベル3で「すべての児童を授業に参加させるため、特に遅れがちな児童に適切に指導を行っている」となっており、レベル4ではその上に「進んでいる児童」にもそれがなされていることが必要になる。やはりそれらが、具体的にどのようなパフォーマンスであるのか、教員・学生ともにイメージできている必要があるだろう。“予めどのようなつまづきが出てくるのかを事前に予想・検討し、対処法を用意しておく”ことや、逆に“応用・発展の活動として、やりがいのある学習を用意しておく”ことなど、用意周到にしておかねばならない。

他の項目・事項についても、参加する者でイメージを共有化することが、ループリック評価の効果を最大限に引き出す要諦であることを強調しておきたい。

3. まとめ

最後に、いくつかの提言をさせていただくことにする。

- (1) 授業の主担当者のリーダーシップのもと、担当教員全員で適切な時期（始めと終わりの2回）に、ループリックの記述について協議する、指導の進め方について共通理解を図る機会を設けることが有効である。このことで多くの問題は解決できるのではなかろうか。
- (2) 示範授業のあり方について再検討するとよい。これまでは今崎教授がループリックについて話をする形であったが、今後はもっと組織的にする必要があるだろう。例えば、授業者や指導・助言者が示範授業を例に挙げながらループリックの記述を説明することなどは大変有効であろう。
- (3) 学生が児童役をする形で模擬授業に参画するときの指導をより具体的にすべきである。この模擬授業は、教師役と児童役とが一体となって作り上げるところに意義がある。特に初めの頃には、児童役として協力しようとする動きがあまり見られず、中盤から終盤にかけて学生も児童役が上手くなり、授業規律を乱したり、学級委員のような態度を取ったり、遅れがちな児童を演じてみたり、わざと答えを間違ってみたりなどすることができてくる。教師役も様々なパフォーマンスを行う経験ができ、かなり勉強になる。これは、学生にしっかりと指導すれば、序盤の段階から実現できると思う。模擬授業で児童役をする時は、ただ漫然と参加するのではなく、上記のようにすれば、結局は自分が教師として授業を構想する上で大いに役に立つのだ、ということを理解させたいものである。
- (4) 担当教員による評価票のフィードバックを、それぞれがより適切にしていくようにする。

以上、検討メンバーなりにまとめたことを示した。最後に、模擬授業・自己評価ループリックをより生かすために、本研究をもとに若干の注記（脚注の形で示した）を施したものを別表1として掲げることとする。多数の方にご覧いただき、ご批評を賜りたく思うと同時に、これらが、今後の取り組みに何らかの好刺激となることを切に願うものである。

Ⅱ「卒業研究」における評価ルーブリックについて

一昨年度から卒業研究の評価ルーブリックが導入された。この実践の成果と課題を集約することにより、改善案を提案する。

1. 「卒業研究」における評価ルーブリックについてのアンケート結果

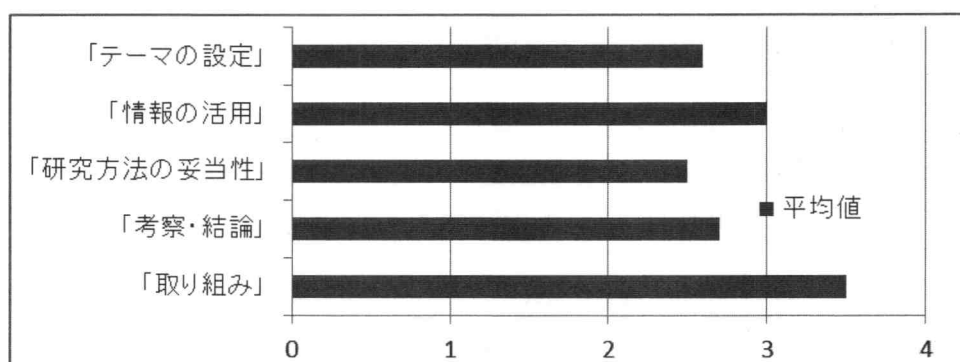
(1) 集計数

11名分である。

(2) 評価のしやすさについて

ルーブリックの各観点について、その評価のしやすさを4段階で質問した。結果は以下の通りである。

(4「とても評価しやすい」、3「評価しやすい」、2「評価しにくい」、1「とても評価しにくい」)



最も平均値が高かったのは「取り組み」の観点であった。11名中、10名の教員が肯定的評価をしている。また「情報の活用」については、11名中、9名の教員が肯定的評価をしていた。その他の観点については、肯定的評価と否定的評価の差はあまりなかった。

(3) 自由記述内容

(ア) テーマの設定について

①どのようなテーマであれば「独創的」とであると評価できたか。

「独創的」とであると評価されたのは「オリジナリティがあったとき」と答えた教員がほとんどだった。先行研究とは異なる目的や、内容であった場合、わずかでも先行研究に新しさを加えたものであれば、という意見もあった。

その他、関係する研究領域への貢献が認められる研究であること、学会発表相当のもの、今日的課題に取り組んだもの、という意見もあった。

以上のことから、テーマにオリジナリティがあれば良い、と考える教員もいれば、いくらオリジナリティがあっても、貢献度の低いものについては評価が下がると考えている教員もいることがわかる。

②意見

「独創的」とはオリジナリティがあることだと考えている教員が多い中、論文である以上はどこかに新規性があるのは当然のことであり、そこであえて「独創性」があればレベル3ということなので、オリジナリティ以上の内容が求められているのではないか、という意見もあった。

また、そもそも卒論の段階で、どこまでの独創性を求めるべきなのか、疑問の声も上がっている。高いレベルの独創性を求めている教員もいれば、先行研究を参考にしつつも、どこか1

部を変えていればそれで十分なのではないか、という教員もいる。

以上の内容から、ほとんどの教員が「独創性＝オリジナリティ」と考えている反面、論文とはオリジナリティがあるのは当然であり、そうするとオリジナリティ以外のものが評価されるべきなのかもしれない。だとすると、レベル3と2の違いをどこに置くのが課題となる。

(イ)「情報の活用」について

①どれくらいの量の情報源であれば「さまざまな情報源」として評価できましたか。

具体的な数を示していた教員の中では「4つ以上」「項目ごとに2～3の文献やデータ」「1つのことに関して3人以上のもの」「10種類以上の先行研究」「100冊の文献や論文」「2種類以上」という意見があり、100冊という飛びぬけた意見を除いても、多少のばらつきが見られた。

しかし、やはり量よりも質と考えている教員も多く、「たくさんの先行研究に当たっていても、活用できていない場合は評価しない」とした教員もいた。また、具体的な数は示していないが、質として「他分野の情報の引用」「自分で収集した一次資料を1つ以上」「Aという考えのもの、Not Aという考えのものが少なくとも揃っていること」とした明確な意見もあった。さらに「教科書分析ならすべての会社のもの、実践事例研究なら現行の学習指導要領以降のもの」などというように論文内容について具体的に決めている教員もいた。

②意見

量よりも質に留意すべきだと考える意見があったが、そうは言ってもレベル2と3の違いがわからないという意見もある。また質を評価するのなら「誰も研究していない、自分で集めてきた一次資料には高く評価したい」という意見もあり、ただ単に量だけを増やしているものとの区別をそうしたところでつけていきたいと考える教員がいた。

以上の内容から、数としては2～100というように大きなばらつきがあった。ほとんどの教員が量よりも質だと捉えているが、その質についての考え方にもやはりばらつきが見られる。

(ウ)「研究方法の妥当性」について

①どれくらいの量であれば、「複数の研究方法や分析の視点」として評価できましたか。

量として具体的な数値を挙げていた中では「2つ以上」「2～3の研究方法、視点」というものがあつた。

また、「先行研究から他の研究ではどのような方法が用いられているか、どのような分析が行われているかを知り、そこから自分の研究方法を決め、その理由について説明ができればよい」というように、数ではないが具体的に考えている教員もいた。さらに「対立や相違している印象の領域をつなぐ努力を評価する」というような意見もあった。

②意見

そもそも、学部生の卒論の段階では、研究方法は限られているのではないか、という意見があった。さらにこのテーマならこの方法、という吟味は学生には難しいのではないかと感じている教員もいる。加えて、研究の進んでいない分野では、複数の方法や視点を導くことすら難しく、複数検討しないとレベル3にならないというのはおかしいのではないかと感じている教員もいる。

困っている教員の意見として「複数の研究方法や分析の視点」がどのレベルまで求められているのかわからないというものがあつた。

文言の内容として、「観点の説明」の「～にあたり」という文言がはっきりしないので、表現を「～を検討し」や「～を吟味し」に修正してはどうかという意見がある。

以上の内容から、具体的に数を挙げている教員は少ない。各教員の意見をまとめると、さまざまな研究方法があることを知った上で、自分の研究ではどのような方法を用いるのか、学生が考えて決定し、最終的には指導教員がその妥当性を判断して評価ができれば、レベル3となる、という認識が適当なように感じられる。

(エ) 「考察・結論」について

①研究内容が「組織的にまとまっている」と判断されるのは、どのような内容だったときですか。

多く見られたのは、目的→先行研究の検討→研究方法の決定→分析・考察→結論という流れで、まとまった内容が書けていることであった。さらに、追加項目として、「明らかにできなかったこと、検討が十分でなかったことについても言及していること」や、「教育や人生への活用が見通せること」「指導法の場合、問題の克服方法が具体的で説得力が大きいこと」という意見があった。

②意見

まず分野ごとにそれぞれまとめ方があるので、評価が難しいという意見があった。

また、観点の説明等の表記に関して、「専門基礎知識」→「専門知識」にした方がよいとの意見や、レベル3の（ ）の文言は観点の説明に入れるべきとの意見、また観点の説明がわかりにくいとの意見があった。

以上の意見により、組織的にまとまっているということについて、具体化されていないので、曖昧ではあるが、どの教員も、まとめ方についてはある程度ずれはないように思われる。しかし、レベル2とするか3とするか、という部分での分類は難しいようである。

(オ) 「取り組み」について（意見のみ）

毎回のゼミでの取り組みや、発表レジュメ、プレゼンテーションも含めて評価すべきであり、また、ゼミへの出席率、提出期限を守ること、などでも評価をし、内容はともかく救済する余地を残すべきだという意見があった。

それに反して、研究における「熱心さ」とは、出席率などではなく、多くの文献に当たり、多くの研究方法を試みることであり、というように述べている教員もいる。

この観点に関しては、そうした態度面を見るのかそれとも研究への熱心さを見るのかによって、つまり教員によって評価が変わってくるのではないか。

(カ) 全体的な面からの意見について

①ループリックの観点以外に評価すべきだと感じる事

この点については、ほとんどの教員が意見を書いていなかった。また「これ以上広げない方がいいのでは」と言っている教員もいる。

逆に、総合的な観点として、論文発表会での質疑への受け答えなどを評価しても良いのではないかという意見もあった。

②改善した方がよいと感じる事

点数の付け方について、いずれかの観点が突出している場合に、1点重みづけできるようにしてはどうか、という意見があった。これは、ループリックで示すことにより、ダイナミックな論文が出なくなるのを防ぐためである。

また、絶対評価と相対評価の教員がいることを問題視している意見もある。全体の評価を見ると、A・Bを中心に置き、そこから相対評価でつけているように感じられるというものである。

表記の問題として、「テーマの設定」と「情報の活用」の観点の説明の中で「さまざまな情報源から」という文言が重複していることを指摘している意見がある。これでは、さまざまな情報源から導いていない場合、2つの観点で評価が下がることになる。「テーマの設定」と「情報の活用」を一くくりにするか、「テーマの設定」の観点から「さまざまな情報源から」の文言を抜くか、どちらかが良いのではないかと指摘している。

そのほかに何よりも、具体例を挙げて協議する場がなければ、評価者の共通理解は深まらなと指摘している。

③このループリックについて感じている事

最も多い意見として、学生の実態を見ると、このループリックでの評価はレベルが高いので

はないか，という意見があった。具体的理由としては「大学の卒業研究では，研究の面白さを感じ，研究活動の方法を学ぶことだから」というものがある。

ただし肯定的な意見も多くあった。学生への指導にあたっては，何をすべきか，どのような点に注意すべきかが具体的にわかるので良いという意見や，指導しやすくなったという意見がある。今後継続して検討していくべきであろう。

なお，観点別の意見は次の頁以降に掲げる。

＜資料＞観点別の意見

(ア) 「テーマの設定」について

テーマの設定		どのようなテーマであれば「独創的」とであると評価できたか。
観点の説明	自身の問題意識やさまざまな情報源から、専門分野に関わる課題・問題を見出し、これについて研究することの意義や仮説を提示している。	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の中身に当該学生のオリジナリティがわずかでもあった場合。 ・現段階であまり研究が進んでいない内容や、方法が従来と異なるアプローチをしている場合。 ・テーマに対する先行研究を調べ、これまでに検討されてこなかった点などを明らかにするために、自分なりの独自のアイデアが盛り込まれているかどうかを「独創的」な基準とした。 ・先行研究の知見を踏まえた上で、先行研究とは異なる研究目的が設定されており、かつ関係する研究領域への貢献が認められる研究テーマである場合。
レベル3	独創的かつ明確なテーマが設定されており、それについての目的や仮説がわかりやすく整理されて示されている。	<ul style="list-style-type: none"> ・本文中で研究の意義について論理的にまとめているもの。 ・過去にあまり研究されていないものに取り組んでいる場合。また絞り込んだテーマで、他にない着眼点をもっていた場合に評価した。 ・「独創」という言葉に、卒論レベルで、学生が自己評価をつけられないと考えている。「独創」という言葉がよく理解できていないとも感じている。
レベル2	明確なテーマが設定されており、それについての目的や仮説がわかりやすく整理されて示されている。	<ul style="list-style-type: none"> ・多少なりとも周辺・社会の現状を踏まえて導かれた自身の問題意識が、先行研究の成果としっかり関係づけられて、読み手が納得できるテーマ。 ・学会発表相当、先進的な提案、諸分野の融合。
レベル1	実現可能なテーマが示されており、それについての目的や仮説が示されている。	<ul style="list-style-type: none"> ・音読の指導を例にすると、テーマ中には「音読の意義」とし、どう指導すれば児童にそれが伝わるか考究したいとするのが、つまり問題意識が漠然としていたり印象で捉えたりしているのが一般的であろう。踏み込んだ学生は、理論と実践の両面から検討するとか、指導法でも「音読カード」「音読評価カード」の提言まで含めたものにするとかの構想できている、そういったレベルのものは独創的と見なした。
レベル0	テーマは設定されているが、目的や仮説がわかりにくい。	<ul style="list-style-type: none"> ・算数・数学教育の今日的課題に取り組んだもの。 ・過去の研究の上に、わずかでもよいので新しさを加えたもの。
		意見
		<ul style="list-style-type: none"> ・「独創性」を卒業研究においてどの程度求めるべきなのか。先行研究を参考にしながら、ある部分の一部を変えていた場合でも十分なのでは。(すべて同じではダメだが) ・論文である以上、どこかに新規性があるのは当然。そこにあえて「テーマの独創性」となると、かなり高いレベルを求められていると考える。レベル2を比較してのレベル3の「独創的」な例を挙げてほしい。 ・卒業研究の段階で、どこまでの独創性を求めるかが難しいところである。少なくとも、学生自身が、自分の研究がこれまでの研究とどのような点で同じで、どのような点で異なるのかをはっきり認識できているテーマ設定である必要がある。 ・指導者として、研究の取りかかりの段階での指導の力量が問われ、苦しいところである。学生としても、評価が辛くなりがちなのではないか。最初の段階と最終の段階とで比較して検討するように働きかければよかった、という反省はしている。

(イ)「情報の活用」について

情報の活用	どれくらいの量の情報源であれば、「さまざまな情報源」として評価できましたか。
観 点 の 説 明	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマに関わる複数の学術論文ならびに著書。 ・レベル2が「複数」なので、数としては4つ以上をイメージした。 ・テーマによるので、一概に情報源がどれくらいあればよいとは言えない。論文などの学術情報を検索できるデータベースなどには、信頼できるさまざまな情報源がある。このような情報源にアクセスして活用できているかどうかで評価した。
レ ベ ル 3	<ul style="list-style-type: none"> ・研究テーマに関係する先行研究として、概説書だけでなく、論文にも過不足なくあたっており、また考察の根拠としてオリジナルのデータを提示していれば評価できる。
レ ベ ル 2	<ul style="list-style-type: none"> ・他分野の情報も引用している場合。 ・研究の中で、項目ごとに2～3の文献やデータなどをもとにして考えていた場合。 ・一つのことにに関して、3人以上の著者の本を参考になっている。統計資料、アンケートデータなど、多様な情報が活用されていること。
レ ベ ル 1	<ul style="list-style-type: none"> ・10種類程度の先行研究（大小はそれほど問わない）に加えて、自分で収集した一次資料を1種類以上。 ・100冊文献や論文にあたるよう指導。
レ ベ ル 0	<ul style="list-style-type: none"> ・二種類以上。つまり、Aという考え方のもの、それとNOT-Aという考え方のものが少なくとも揃っていることがポイント。もちろん、三種類さらにそれ以上はなおよい。 ・内容によって異なる。教科書分析ならすべての会社のもの。実践事例なら、現行の学習指導要領以降のもの、など。
意見	
<ul style="list-style-type: none"> ・どの程度の文献を利用しているかということになるので、文献研究の場合はかなりの量を示さないといけないと思う。 ・「さまざまな情報源」という表現から、量だけでなく情報の種類も求められていると考えた。そのため、昨年度はほとんどの学生がレベル2止まりだった。レベル2と3の違いを示す例が欲しい。 ・情報の量だけでなく、質にも留意する必要がある。 ・誰も研究していない、自分で集めてきた一次資料（アンケートや実践、公文書・議事録など）の活用について、先行研究の羅列や濫読と区別して高く評価できるようになると良い。 ・最近では、容易に情報源にアクセスできるので、それ以降の見極め判断や編集能力を評価するのは当然。 	

(ウ) 研究方法の妥当性について

研究方法の妥当性		どれくらいの量であれば「複数の研究方法や分析の視点」として評価できましたか。
観 点 の 説 明	複数の研究方法や分析の視点にあたり、研究目的とテーマに適した方法を選択している。	<ul style="list-style-type: none"> ・分析の視点が複数というのはわかるが、研究方法が複数というのは、よくわからない。 ・量としては2つ以上。 ・信頼できるデータベースにある多くの関連文献を読むことによって、他の研究ではどのような方法が用いられているか、どのような分析が行われているのかを学ぶことができる。テーマにふさわしい研究手法として、なぜその方法を用いたかどうかについて、説明できなければならない。 ・研究目的とテーマに関係する先行研究に過不足なくあたっている場合。 ・2つ以上。 ・学部生の場合、研究の方法は限られているように思い、分析の視点を重視した。量というよりは、研究テーマにそって必要な分析の視点が示されていた場合。 ・「複数の研究方法」では、文献、一次資料としての実践記録があれば、良いと思う。「複数の分析の視点」は、理解が不十分で分かりにくい。 ・2～3の研究方法・視点。(すぐれた方法・視点が得られれば良いので、「量」を聞かれると戸惑う) ・数は括りの問題で、むしろ対立や相違している印象の領域をつなぐ努力を評価する。 ・こういったテーマならこの方法をという吟味は、学部生レベルでは難しいのではないと思う。先行研究で取られていた方法に似せていくというやり方で、ずるずるといってしまう(教員としてもそれを認めてしまった)きらい・悔いがある。 ・複数。
レ ベ ル 3	複数の研究方法や分析の視点から、目的とテーマにふさわしい研究方法を用い、明確な分析の視点を示している。	
レ ベ ル 2	目的とテーマに沿った研究方法を用い、分析の視点を示している。	
レ ベ ル 1	研究方法と分析の視点について、必要なポイントを捉えている。	
レ ベ ル 0	研究方法と分析の視点について示されているが、必要なポイントが捉えられていない。	
		意見
		<ul style="list-style-type: none"> ・研究方法を複数もって研究することがわからない。目的を明らかにするためには、最良と考えられる1つの方法で良いのではないか。特に卒業研究レベルなら。 ・「複数の研究方法」の部分などがどのレベルまで求められているのか不明確なので、レベル2と3の違いを明らかにしてほしい。 ・研究の進んでいない分野では複数の方法・視点を得ること自体難しい。また、多数の方法・視点を検討すればするほどよい研究になるかというところでもない(不要な論述を増やしても、紙幅の無駄です)。卒業研究レベルであれば、せいぜい2つ程度の方法・視点を比較して適した方法・視点を導入するので十分だと個人的には思う。複数検討したかどうかレベル3の基準になるのは、かなり違和感。また、「観点の説明」にある「にあたり」という意味がはっきりしないので、表現を再考してもらいたい。「を検討し」または「を吟味し」ではどうか。 ・ひとえに教員の指導力にかかっていると考え。様々なパターンを教員同士で共有化するとよいと思う。研修・研究の必要性もある。

(エ) 「考察・結論」について

考察・結論		研究内容が「組織的にまとまっている」と判断されるのは、 どのような内容だったときですか。
観 点 の 説 明	焦点に沿って研究内容を組織的にまとめ、類似点・相違点・パターン化の発見などさまざまな観点から検討し、専門基礎知識を用いながら論理的に自分の意見を提示している。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目的を明らかにするための結果を導き出し、そこから先行研究を参考にしながら考察を行い、テーマに掲げた内容（目的）の答えを出していること。 ・ テーマから導かれる研究内容が不足なくまとめられている場合と解釈した。 ・ 問題の設定が明確であり、そこから作業仮説が導き出される。そして、テーマに沿って方法が実施され、結果が分析され、専門領域の観点から結果にもとづいた考察が行われているとき。 ・ 論文の本論が研究目的に対応する形で構成され、かつ考察の記述が研究目的に対応する形でなされている場合。 ・ 研究によって明らかになった結果を、研究目的に沿ってまとめ、今回の研究では明らかにできなかったことだけでなく、検討が十分でなかったことについても言及している場合。 ・ 論文の内容の関連性を明確にして論述している場合。 ・ 卒論全体が論理的、問題解決的に構成されていること。 ・ 各章節の内容が整理されてまとめられ、読み手が納得できる形で相互に関連づけられている内容。 ・ まず論理的整合性、さらに、教育（人生）への活用が見通せる場合。 ・ 指導法の場合だが、学習者の発達段階や教材の特質をふまえ、問題点の克服方法が具体性をもって導かれ、説得力も大きいということになると思う。
レ ベ ル 3	研究内容を組織的にまとめ、専門基礎知識（自分の専門分野の概念や枠組み）を用いて論理的に説明・提案できている。	
レ ベ ル 2	研究内容をまとめ、専門基礎知識をある程度用いて説明・提案できている。	
レ ベ ル 1	研究内容をまとめ、専門基礎知識を用いて説明・提案しようとしている。	
レ ベ ル 0	研究内容を列挙しているが、まとめることができておらず、専門基礎知識を用いての説明・提案もできていない。	
		意見
		<ul style="list-style-type: none"> ・ さまざまな分野にそれぞれの論文のまとめ方があるので、評価が難しい。 ・ 「組織的にまとめる」というのはどのようなものなのか、例を挙げてほしい。 ・ レベル3の（ ）に書かれているものに対する「専門基礎知識」という表現に、違和感があります。「専門知識」でよいのではないか。また、「観点の説明」の「焦点に沿って」および「類似点～検討し」という表現がわかりにくい。さらに、レベル3の（ ）は、レベル3の欄内ではなく「観点の説明」内に書いた方がよい。 ・ 「焦点に沿って」という文言は伝わりづらいのではないか。

(オ) 「取り組み」について

取り組み		意見
観 点 の 説 明	継続的かつ熱心に取り組んでいる。	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の卒業研究では、1～4までの観点よりも、この「取り組み」の観点にもっと重きをおいて評価しても良いと思う。 ・毎回のゼミでの取り組みに加え、中間発表、本発表でのレジュメ作成、プレゼンテーションの仕方も含めて評価すべき。 ・主観も入るかもしれないが、継続して指導するため、この点は評価しやすかった。 ・ゼミの出欠席、決められた期限までの原稿提出、真剣に取り組んでいるなどから評価したが、もっとも評価が高くなっている。 ・これによって、内容はともかく救済する余地を残しておくべきだろう。成果物がきちんとしていれば自動的に評価されるだろう。 ・出席、意欲・態度、発表時・非発表時を問わず積極的である、という面からはよく掴めると思う。 ・研究における「熱心さ」は、多くの文献に当たる、多くの研究方法を試みることに。
レ ベ ル 3	1年間にわたって継続的かつ熱心に取り組んだ。	
レ ベ ル 2	熱心に取り組んだ。	
レ ベ ル 1	やや不十分ではあるが、熱心に取り組んだ。	
レ ベ ル 0	取り組みが不十分であった。	

(カ) 全体的な面からの意見

ループブリックの観点以外に評価すべきだと感じること
<ul style="list-style-type: none"> ・総合的な観点として、自分の研究をどの程度理解しているかを評価するために、卒業研究発表会での発表、質疑に対する受け答えを含めても良いのではないかな。 ・これ以上広げないのがいいのではないかな。
改善した方がよいと感じること
<ul style="list-style-type: none"> ・「取り組み」以外のいずれかの観点が突出している場合には、1点重み付けできるようにしてはどうか。ダイナミックな論文が出にくくなってしまうため。 ・具体例を挙げて協議する場を設定するなどすれば、評価者の共通理解が深まる。 ・「テーマの設定」において求められる「独創的であること」を別の表現にできないかと考える。あるいは、「独創的であること」の、このループブリックでの定義を明確にする。 ・「テーマの設定」と「情報の活用」の「観点の説明」に重複する記述（「さまざまな情報源から」）がある。「テーマの設定」の基準では「さまざまな情報源」がないので、削除したほうが良いのではないかな。あるいは「独自のテーマ」を設定するには、「さまざまな情報源」が必要なため、「テーマの設定」と「情報の活用」の2つの観点を統合しても良いのではないかな。独自のテーマが設定できていない場合、必然的に2つの項目で評価が下がってしまう。 ・学生に示して説明し、実際の指導の際に具体的に伝えたりもしているが、学生には理解しにくいようである。 ・教員による評価基準の差が感じられる。私は絶対評価で付けている。すると、B・Cが大半である。Aもいるが、Sは出る可能性はないと感じる。こちらがかなり手を入れてやれば可能となるかもしれないが、共同研究ではないので。全体の評価を見ると、A・B辺りを中間的に置いて、相対評価で付けていると感じる。 ・事前説明をより丁寧にする。学生からも意見をもらいながら改善していくこと。 ・表の中の記述を具体的にする。

このルーブリックについて感じていること

- ・全体的な評価が必要なため、仕方ない部分はあるかもしれないが、大学の卒業研究で評価すべきことは、その取り組み（学ぶが進めば意欲的になることがある→研究の面白さを感じる）と、研究活動全般のやり方（先行研究の調べ方、研究のまとめ方、調査研究の方法、実験研究の方法、文献の活用の仕方など）を知っておくことではないか。このあたりをうまく評価できればと思う。そんなに簡単に独創的な研究が生まれるとは思えない。学んでほしいことをうまく評価できればよいと思う。
- ・高い評価を得ようとする、すべての観点でのバランスが求められる。将来に向けて挑戦するような論文が出にくくなるのではないか。
- ・本学学生の実態、人材育成目標、学士論文に求めるレベル、他大学の比較などの問題で難しいが、若干レベルが高いのではないか。論文として物足りない面もあり、研究者も育ちにくくなるかもしれないが、諸般の事情を考えれば、評価方法のレベルを少し下げても良いのではないか。正直卒業研究で成績B、Cはやはりつらい。
- ・学生に評価の観点を示すことができるために、卒研の評価をしやすくなった反面、基準に到達させるために教員の指導力が問われることになる。
- ・学生に提示することで、卒業研究を行うにあたり、何をすべきか、どのような点に注意すべきかが具体的にわかるので良いと思う。
- ・学生の実態を見ていると、レベル3達成に向けて取り組むように指導することの困難さを感じている。大学での学びの集大成となるし、学士力を身につけるため、指導方法を教えてもらいたい。
- ・とてもよい取り組みだと思いますので、改善しながら続けていきましょう。
- ・とても指導しやすくなった。
- ・継続研究を望む。

2. 考察

学生の指導がしやすくなったことや、何をすべきか、何に注意すべきかが具体的にわかった等の成果が得られたことは収穫である。

一方、課題につながる意見としては、教員によって「独創的」や「複数の」、「熱心に」などという文言の捉え方にズレがある（例：複数→4つ以上、10種類以上、100冊の文献や論文、項目ごとに2～3つなど）、卒業論文という段階においてどこまで求めるべきなのか迷っている、絶対評価と相対評価の教員がいる、ルーブリックで評価することによりダイナミックな論文が出なくなるのではないかと、具体例を挙げて協議する場が必要というものがあり、それらの解消に向け、教員団として努力したいと考える。

3. まとめ

基本的なスタンスとして、卒業研究の評価ルーブリックは全学的なものであるため、ルーブリックの表現はそのままにし、「初等教育学科における共通理解事項」欄に本学科としての共通理解内容を記述するという立場を取り、ここに提言という形で示すことにする。ここでは、ダネルら（2014）を参照していることを付言しておきたい。

(1) 「初等教育学科における共通理解事項」欄の記述内容

① 「テーマの設定」について

独創的とは、明確なテーマ設定、即ち他の進行中の研究または先行研究やその分析に基づいていることが明確に示され、それらの引用箇所が明示されているという前提に立ち、今日的課題の解決に寄与するテーマ内容だと認められることを指す。

②「情報の活用」について

レベル3のさまざまな情報源：参考文献は学术论文等信頼できるものであり、10本程度参照している。

レベル2の複数の情報源：参考文献は学术论文等信頼できるものであり、5～6本程度は参照している。

レベル1の複数の情報源：参考文献はおおよそ設定したテーマに関連するものであり、2～3本程度は参照している。

(テーマによって上記の本数の確保が難しい場合、評価の判断は指導教員に任せる。全般的に、それらの参考文献は、その内容が論文に効果的に活用できると指導教員が評価していることを前提とする。)

③「研究の妥当性」について

レベル3の複数の研究方法や分析の視点から、目的とテーマにふさわしい研究方法を用い、明確な分析の視点を示しているとは、さまざまな研究方法があることを知った上で、自分の研究ではどのような方法を用いるのか、学生が考えて決定したのだということが明確に記述されていることをさす。(指導教員が妥当性ありと判断し、評価していることが前提である。)

④「考察・結論」について

レベル3の組織的にまとめるとは、目的→先行研究の検討→研究方法の決定→分析・考察→結論という流れで、まとまった内容が書けていることをさす。

⑤「取り組み」について

レベル3の1年間にわたって継続的かつ熱心に取り組んだとは、毎回のゼミでの取り組みにおいて手を抜くことがなく(出席率も含む)、発表レジュメ・プレゼンテーションもわかりやすく丁寧であり(発表会におけるそれらも含む)、各種提出物の締め切りもきちんと守れていることをさす。

(2) 全体的な面での提言

①ルーブリック評価を行う前提として

卒業研究については、教育課程、シラバスに4単位と示されており、週あたり授業2コマ(3時間)、事前・事後学修4時間(シラバスには8時間となっている)を行わなければならないと言える。このことを満たしていることが、ルーブリック評価を受ける最低条件だと考える。

今日の大学教育において、教員・学生の協働的な学修が求められていることを踏まえると、いずれの専修においても、週2コマ(3時間)×30回=60コマ(90時間)は授業が行われ、その中で発表・協議等の学修が行われる必要がある。しかしながら、本学科における卒業研究の指導は、卒業研究は学生一人一人が行うこと、従前からの慣習によって、ややもすれば個別指導中心になっているところもあるのではないかと。学生の心情的な面も鑑みて、毎週3時間の授業を行っている専修と、そうでない専修が、同じ評価規準・評価基準で評価されることに不公平感を抱き、本来ルーブリック評価でめざしている学生の学修意欲の向上を阻害することになりかねない。

以上の理由から、備考欄に、次の文言を明記すべきだと考える。

シラバスに示された授業に出席し、事前・事後学修を行うこと

②教員の取組について

松下(2014)は、「パフォーマンス評価」(卒業研究もパフォーマンス評価の1つと見て)の手続きとして、次のように述べている。

- 1 3人の採点者で、採点とルーブリック作成を行う。
- 2 一般評価規準の各観点とスキル・レベルについて、共通理解を形成しておく。
- 3 課題分析を行い、予想される解法をリストアップする。

- 4 採点に入る前に、課題別採点基準（ルーブリック）の素案を作っておく。
- 5 採点者ごとに、採点を行う。
- 6 採点結果を1部ずつつきあわせ、得点を採点者間で一致させる。
- 7 採点と同時平行で、ルーブリックを修正・加筆していく。
- 8 ルーブリックを完成させるとともに、そのルーブリックにしたがって、採点を見直し、得点を確定させる。
- 9 ルーブリックの説明や解答傾向の分析に役立つように、特徴的な採点事例を抽出する。

上記の手続きを全て取り入れる必要はないと思うが、現在行っている評価の客観性・妥当性を高めていくためには、5～8のような取り組みを取り入れる必要があると考える。

例えば、次のような取り組みである。

- 1 各教員が同じ卒業研究を読み、評価を行う。
- 2 各教員が行った評価をつきあわせ、得点を一致させる。
- 3 ルーブリックを修正・加筆する。

こうした取り組みは、評価の客観性・妥当性を保証するだけではなく、私達教員の評価の力量の向上、卒業研究の指導力の向上にも資すると考える（教員が多忙であるという現状の中で行うとするならば、FD活動として行うことも考えられる）。

このように複数で、あるいは組織的に、チェック・評価する体制とすることを、今後取り入れていくよう提言する。

今後の課題としては、本研究の実践的検証をさらに進めていくことと、実技系の評価ルーブリックや評価のあり方を見直し、よりよいものにしていくことが挙げられる。

なお、最終的な「初等教育学科における共通理解事項」を含む卒業研究評価ルーブリックを後に示しておくことにする（別表2）。

参考文献

- ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ.2014.大学教員のためのルーブリック評価入門.玉川大学出版部.
- 今崎 浩.2015.広島文教女子大学におけるルーブリック評価の導入について:成果と今後の課題.広島文教女子大学高等教育研究第1号.
- 松下佳代.2014.パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—.日本標準.

別表1:「教育実習Ⅰ」(小学校)における模擬授業・評価ルーブリック

【授業評価表(授業者用)】

キーワード	評価基準	評価方法	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	評価
1 教材分析力	教材を分析することができる	学習指導案の記述 事前指導での説明	教材観に次の事項が記述され、その内容について理解している 1 学習指導要領の位置付け 2 単元のねらいと主な学習内容 3 学習内容の系統性 4 学習内容の持つ価値、背景	教材観に次の事項が記述されている 1 学習指導要領の位置付け 2 単元のねらいと主な学習内容 3 学習内容の系統性 4 学習内容の持つ価値、背景	教材観に次の事項が記述されている 1 学習指導要領の位置付け 2 単元のねらいと主な学習内容 3 学習内容の系統性	教材観に次の事項が記述されていない 1 学習指導要領の位置付け 2 単元のねらいと主な学習内容 3 学習内容の系統性	
2 授業構想力	教材研究を生かした授業を構想し子どもの反応を想定した学習指導案をまとめることができる	学習指導案の記述 (指導観)	教材観・児童観を踏まえ、学習展開や指導方法の工夫、指導上の留意点等が具体的に記述されている ・単元の内容及び評価規程が記述され、適切に設定されている ・指導観に記述された内容を踏まえ、単元の計画に工夫が見られる ・学習過程に次の事項が記述され、1時間の流れが分かる 1 本時の問題(資料・教材) 2 指導者の発問・指示・説明 3 指導上の留意事項 4 評価規程・評価方法 ・指導観に記述された内容が学習過程に反映されている	教材観に次の事項が記述され、1時間の流れが分かる 1 本時の問題(資料・教材) 2 指導者の発問・指示・説明 3 指導上の留意事項 4 評価規程・評価方法	教材観に次の事項が記述されている 1 本時の問題(資料・教材) 2 指導者の発問・指示・説明 3 指導上の留意事項 4 評価規程・評価方法	教材観に次の事項が記述されていない 1 本時の問題(資料・教材) 2 指導者の発問・指示・説明 3 指導上の留意事項 4 評価規程・評価方法	
3 教材開発力	教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料を開発・作成することができる	学習指導案の記述 (板書計画)	1 時間の学習の流れが分かる板書計画を作成している ・児童の思考を促したり、理解を深めたりするための工夫が見られる ・本時の目標の達成に向け、適切な教材・資料、教具を用意している ・先行実践等を参考にすると、授業者なり工夫が見られる	本時の目標の達成に向け、適切な教材・資料、教具を用意している	教材・資料、教具を用意している	教材・資料、教具を用意していない	
4 授業展開力	子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる	模擬授業の状況	・学習規律について毅然とした態度で指導している ・学習規律を守っている児童を認めたり、学習規律を守る意義を説明したりする等している 児童の質問を聞き、それに対応している	学習規律について毅然とした態度で指導している 児童の質問を聞き、それに対応している	学習規律について指導している 児童の質問を聞いている	学習規律について指導していない 児童の質問を聞いている	
5 表現技術	子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる	模擬授業の状況	児童の活動(意見、表現等)を観察し、それを適切に取り上げ、授業の中で生かしている すべての児童を授業に参加させるため、進んでいる児童、遅れがちな児童それぞれに適切な指導を行っている ・全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行っている ・学年に応じた正しく分かりやすい言葉遣いで行い、内容も簡潔にまとめている ・1時間の学習の流れが分かるように板書している ・児童の思考を促したり、理解を深めたりする工夫をしている ※模擬授業は20(15)分のため、残りの25(30)分も想定した黒板の使い方をしている	児童の活動(意見、表現等)を観察し、それを授業の中で生かそうとしている すべての児童を授業に参加させるため、特に遅れがちな児童に適切な指導を行っている ・全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行っている ・学年に応じた正しく分かりやすい言葉遣いで行っている 1時間の学習の流れが分かるように板書している ※模擬授業は20(15)分のため、残りの25(30)分も想定した黒板の使い方をしている	児童の活動(意見、表現等)を観察している 児童の活動(意見、表現等)を観察していない 一部の児童で授業を進めている 全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行うことができていない	児童の活動(意見、表現等)を観察していない 児童の活動(意見、表現等)を観察していない 一部の児童で授業を進めている 全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行うことができていない	

(注1) 学習指導案が模擬授業までに提出されなかった場合、配慮すべき理由がなくて模擬授業が実施されなかった場合は品とする (注2) 学習指導案は最終的に提出されたもので評価を行う。

【本ルーブリックの運用上の留意事項としての提案】 ※基本的には、各項目には段階性もあり、よく汲み込んで理解すれば、教員間あるいは教員と学生間でも大きな見解の相違は出ないものと考えられる。よって、このような提案の形とした。

1. 学生に段階的な余裕を持たせて、じっくりと振り返らせ、具体的な取り組みを想起させるように配慮すること。(教員についても同様である。)この事後の活動をより丁寧に行うことで、本ルーブリックの効果が上がるに違いない。具体的には、次のようにしていくとよいと思われる。上記の各セルのスペースをゆとりと使おうように組み直し、書き込みをしやすくする。例えば、枠組み・アンダーライン・コメント等をつけて読みやすくする。ただ点数をつけて終わりでは効果が上がらないわけである。当日は、録画(録音)やデジカメでの写真撮影等をして記録を取っておき、それに基づいて記述していくのが望ましい。また、本ルーブリックを、3年生前期の間にだけでなく、他のセメスターでも活用できるように心がける。学生の目に多く触れさせ、慣れさせることが必要であろう。

2. 各項目についてのイメージの共有化をしていくように努めること。例えば、「1時間の学習の流れが分かる板書等の計画を作成している。」の場合、実技系教科(音・図・体)とそれ以外の教科(国・社・算・理・道)では差があるだろうが、どんなことを、どのような構成で、どの程度書いておくのかなど、全体会あるいは配付資料等で示しておくたいものである。

合計

別表2:「卒業研究」ルーブリック【初等教育学科 共通理解】

「卒業研究」ルーブリック【初等教育学科 共通理解】

各項目の評価に先立つ共通理解事項：シラバスに示された授業に出席し、事前・事後学修を行うこと

	テーマの設定	情報の活用	研究方法の妥当性	考察・結論	取り組み
観点の説明	自身の問題意識やさまざまな情報源から、専門分野に関する課題・問題を見出し、これについて研究することの意義や仮説を提示している。	さまざまな情報源から信頼できるものを選択し、自分の意見を支える根拠などとして活用している。	複数の研究方法や分析の視点にあたり、研究目的とテーマに適した方法を選択している。	焦点に沿って研究内容を組織的にまとめ、類似点・相違点・パターン化の発見などさまざまな観点から検討し、専門基礎知識を用いながら論理的に自分の意見を提示している。	継続的かつ熱心に取り組んでいる。
レベル3	独創的かつ明確なテーマが設定されており、それについて目的や仮説がわかりやすく整理されている。	信頼できるさまざまな情報源から、これまでに明らかにされた知見や課題を、自分の研究に関連づけて活用している。	複数の研究方法や分析の視点から、目的とテーマにふさわしい研究方法を用い、明確な分析の視点を示している。	研究内容を組織的にまとめ、専門基礎知識(自分の専門分野の概念や枠組み)を用いて論理的に説明・提案できている。	1年間にわたって継続的かつ熱心に取り組んだ。
レベル2	明確なテーマが設定されており、それについて目的や仮説がわかりやすく整理されて示されている。	信頼できる複数の情報源から、これまでに明らかにした知見を、自分の研究に関連づけて活用している。	目的とテーマに沿った研究方法を用い、分析の視点を示している。	研究内容をまとめ、専門基礎知識をある程度用いて説明・提案できている。	熱心に取り組んだ。
レベル1	実現可能なテーマが示されており、それについての目的や仮説が示されている。	複数の情報源から、これまでに明らかにした知見を示し、整理している。	研究方法と分析の視点について、必要なポイントを捉えている。	研究内容をまとめ、専門基礎知識を用いて説明・提案しようとしている。	やや不十分ではあるが、熱心に取り組んだ。
レベル0	テーマは設定されているが、目的や仮説がわかりにくい。	限られた情報源から、これまでに明らかにした考え方や研究内容を何らかしらか紹介しているが、テーマとの関係が乏しい。	研究方法と分析の視点について示されているが、必要なポイントが捉えられていない。	研究内容を列挙しているが、まとめることができておらず、専門基礎知識を用いての説明・提案もできていない。	取り組みが不十分であった。
備考		信頼できる情報とは、大学、公的機関、学会、各種団体、新聞などの情報をさす。一方、信頼性の低い情報とは、作成者や所属の書かれていないものや個人のブログなどの情報をさす。			
初等教育学科における共通理解事項	独創的とは、明確なテーマ設定、即ち他の進行中の研究または先行研究やその分析に基づいていることが明確に示され、それらの引用箇所が明示されているという前提に立ち、今日の課題の解決に寄与するテーマ内容だと認められることをさす。	レベル3のさまざまな情報源：参考文献は学術論文等信頼できるものであり、10本程度参照している。 レベル2の複数の情報源：参考文献は学術論文等信頼できるものであり、5～6本程度は参照している。 レベル1の複数の情報源：参考文献はおおよそ設定したテーマに関連するものであり、2～3本程度は参照している。 (テーマによって、上記の本数の確保が難しい場合、評価の判断は指導教員に任せる。全般的に、それらの参考文献は、その内容が論文に効果的に活用できると指導教員が評価していることを前提とする。)	レベル3の複数の研究方法や分析の視点から、目的とテーマにふさわしい研究方法を用い、明確な分析の視点を示しているとは、さまざまな研究方法があることを知った上で、自分の研究ではどのような方法を用いるのか、学生が考えて決定したのだということが明確に記述されていることをさす。(指導教員が妥当性ありと判断し、評価していることが前提である。)	レベル3の組織的にまとめるとは、目的→先行研究の検討→研究方法の決定→分析・考察→結論という流れで、まとめた内容が書けていることをさす。	レベル3の1年間にわたって継続的かつ熱心に取り組んだとは、毎回のゼミでの取り組みにおいて手を抜くことがなく(出席率も含む)、発表レジュメ、プレゼンテーションもわかりやすく丁寧であり(発表会におけるそれらも含む)、各種提出物の締め切りもきちんと守れていることをさす。